

OSS License Checked! *Orchestrating a brighter world* **NEC**

オープンソースの 95% を OSS 4.0
**オープンソースカンファレンス
 2018 Nagoya**

OSSライセンスと著作権法のポイント
 ～皆さんごとを新する PartII: OSSとOSSライセンスを合理的にこなすよう

2018年5月19日
 NEC OSS推進センター・姉崎智博



未来に開いた、人の生き様。豊かに生きあふ未来に突き進むために。
それは「変革」(変化・刷新)「共生」(共存)という価値観の両輪による変革です。

NICEは、ネットワーク性に基づくデザイン性や豊かさを追求する
「豊かさを創るデザイン・チーム」をコアコンピタンスと位置づけ、
卓越した技術と、さまざまな価値やアイデアを創出することで、
世界に広がる価値の入り口と結節点になり、
国と人(組織)と社会が豊かに生きあふ世界を実現し、未来に突き進むことができます。

自己紹介

- NEC OSS推進センター所属、姉崎章博
- 元、汎用機ACOSの通信管理、OS/2標準化、実装に関わる
- IA-64 Linuxの実装、Linuxの普及に関わる
- OSSライセンスの解説に取り組む2006~
- 現在、OSSライセンスの啓蒙・コンサルに注力
- @IT連載記事「企業技術者のためのOSSライセンス入門」執筆
- 著作権関係記事 第2回著作権・著作権隣接 論文 佳作入選

「OSSライセンスとは〜著作権法を権源とした解釈」

「著作権者」の専門の先生方には一定の評価をいただいた

OSSとは
Open Source Software

(おおまかに言えば) 定義ではないよ

ソースコードが入手でき、
ソースコードの改変と
手を加えたソースコードの再頒布
が認められているソフトウェア

フリー(自由)ソフトウェア/OSSの歴史

● 藤田明人「Unix考古学」第8章より	1970年代
「ソースコード付きで配布」というOSSの先駆け/元祖であるUnix	
● UCBの学生ビル・ジョージがBSD版UNIXを開発	名無し
● リチャード・ストームツマがGNUプロジェクトを開始	1980年代
● GNU EmacsをFree Software(自由ソフトウェア)としてリリース	
● GNU GPL	GNUソフトウェア
● CERNで初めてWorld Wide Webが構築される	1990年代
● リナース・トーバルズが最初のLinuxをリリース	
● Netscapeが「オープンソース」Mozillaとして公開	オープンソース

Timeline of Free Software/OSS history:

- 1970年代: 藤田明人「Unix考古学」第8章より
- 1980年代: リチャード・ストームツマがGNUプロジェクトを開始
- 1990年代: CERNで初めてWorld Wide Webが構築される
- 2000年代: Netscapeが「オープンソース」Mozillaとして公開

Logos: GNU GPL, Netscape, NEC

プログラムとしては、現在、すべてを

フリーソフトウェアと呼び **オープンソースと呼ぶ**

藤田眠人 (Unix考古学) 著 第8巻 2013年

- 【ソースコード付きで配布】というOSSの先駆け/元祖であるUnix
- UCBの学生ビル・ジョイがBSD版UNIXを開発
- リチャード・ストールマンがGNUプロジェクトを開始
- GNU EmacsをFree Software(自由ソフトウェア)としてリリース
- GNU GPL
- CERNで初めてWorld Wide Webが構築される
- Netscape / トールバールが最初のLinuxをリリース
- Netscapeが「オープンソース」 Mozillaとして公開

ストルマン以前からフリーソフトウェアは存在
「ソフトウェアを共有するという行為は、
最近になってわれわれが始めたことではない。」
「ソフトウェア・ストルマン」(「自由なソフトウェア・フリーソフトウェア運動」)

- 田中典人「Unix考古学」第8巻より
「ソースコード付きで配布」というOSSの先駆け/元祖であるUnix
- UCバの学生ビル・ジョブがBSD版Unixを開発
- リチャード・ストルマンがGNUプロジェクトを開始
- GNU EmacsをFree Software(自由ソフトウェア)としてリリース
- GNU GPL
- CERNで初めてWorld Wide Webが構築される
- リナース・トーバルズが最初のLinuxをリリース
- Netscapeが「オープンソース」Mozillaとして公開

7

© 2004 Pearson Education, Inc. All rights reserved. 2004年12月

自由ソフトウェアとは？

<https://www.gnu.org/philosophy/free-sw.ja.html>

あるプログラムが自由ソフトウェアであるとは、
その...利用者が、以下の4つの必須の自由を有するときです

1. どの目的に対しても、プログラムの望まざるを有**実行**する自由
2. プログラムがどのように動作しているか研究し、
必要に応じて**改造**する自由
3. 必要なる人を助けられるよう、コピーを**再頒布**する自由
4. 改造した版を他者に**頒布**する自由

OSSでいう「自由」も、こういう「プログラムの自由」

さて、NetBSDやPostgreSQLに、4つの自由は？

実行の自由 改変の自由 再配布の自由 改変版配布の自由

ありますよ。

⇒ GPLでなくても、フリーソフトウェア(OSS)

「この自由を実現するのがGPL」

とかの説明を見かけるが

4つの自由を実現しているのはGPLだけじゃない。

GPLやBSDには、どんな条件が書かれているか

各ライセンスで表現は様々ですが...

- 著作権表示、条文本体、免責条項を
見るように(コピー)すること等
- バイナリのソースコードを(またも、
その申し出を)添付すること等

BSD など

- 条件を包含し
ている必要が
ある
GPLなど
- こちらだけの
条件ではない

これらは、義務ではなく、再頒布の際の条件です。

[illegible]

OSSライセンス条件の位置づけ

OSSライセンスとは、OSSを運用者が利用するにあたり著作権者の行使の許諾

著作権行使をしないなら、
ライセンス条件は関係ない

Webで公開

ダウンロード

同じOSSを使った
アプリケーションを開発したとしても

GPUなど、このOSSライセンス条件
を満たさず、開発される

著作権行使をしないなら、
ライセンス条件を
を満たす必要あり

Webで公開

ダウンロード

許可を得る必要あり

無断なら著作権侵害

「同じOSSを使った開発をして、ソース開示は義務だが？」
とか「ソース開示しただけでソースコードもそのままでも使っちゃいい？」
という問いは、著作権行使をするのかを問うがにせよねばナンセンス

12 © 2016, Copyright Corporation 2016 NEC

[illegible][illegible][illegible][illegible]

やっぱり、
すべてOSSは、4つの自由をすべて持つ。
すべてのOSSは、フリーソフトウェアでもある。
GPLだけが、4つの自由を実現
しているわけではない。
WP「GPL Primer」の下記表現はちょっと違う。
『4つの自由』はGPLとして成文化されている

さて、
第二、第三の自由を実現するOSSライセンス

条件を満たさないといけないと…

著作権侵害の損害額？

- 昔はよく聞かれた。
- OSS開発者が**企業でない**場合、大きくはないが、
● 業の権利である特許と連動し権利を**買うことができない**。
→ 敗訴すると**販売停止命令**。ヘウゼンハウスの事例
→ 無期限の出荷停止(差し止め)と同じ。
● 他社の特許プログラムをソース開示できないなどの理由で
ソース開示できないことが多い。
● 問題ない形で作り直すと半年や1年かかる。
→ **半年/1年の出荷停止の損害額が莫大な金額では**

このようなリスク(?)に対して、何をしなければいけないか？

OSSは一般に他人の著作物

であることを理解し、
そのように扱うこと

A diagram illustrating the structure of Copyright Law. At the top, a box labeled '著作権法' (Copyright Law) is connected to '著作権も「ものへの支配権」の一つ' (Copyright is also one of the 'rights of control over things'). Below this, a box labeled '著作権法入門' (Introduction to Copyright Law) is connected to '著作権法' (Copyright Law). The diagram then branches into '有体物' (Tangible Objects) and '無体物' (Intangible Objects). '有体物' is connected to '所有権' (Ownership) and '著作権' (Copyright). '無体物' is connected to '標識' (Trademark), '創作' (Creation), '伝達対象' (Object of Transmission), and '伝達手段' (Means of Transmission). These are further connected to '著作権' (Copyright), '著作権' (Copyright), '著作権' (Copyright), and '著作権' (Copyright) respectively. A large blue arrow points from the bottom of the diagram to a box labeled '契約と権利: 何の権利も無きに権利が発生する' (Contract and Rights: Rights arise even without any rights). Below this, a box labeled '2014年12月 第2回 著作権' (December 2014, 2nd Copyright) is shown. At the bottom, there is a footer with '© 2014 Copyright 2014' and a logo for 'Copyright Law'.

他人の権利	所有権	著作権
他人の権利の行使	商品の貸出し	GPLの権利の行使(複製)
行使が許される条件1	現金支払い	ソースの提供
行使が許される条件2	租税 (コピー、カード支払い)	ソース提供する際の 保証の明示
条件を満たさなければ	罰金(75万/年)	著作権侵害(GPL違反)

十万元以上の賠償額は五十万以下で済む
 十万元以上の賠償額は五十万以下で済む
 十万元以上の賠償額は五十万以下で済む

他人の権利を侵害したら、ソース公開しなさい
 他人の権利を侵害したら、ソース公開しなさい
 他人の権利を侵害したら、ソース公開しなさい

「戻ったから、払えばいい」という常識的な思い込みと変わらない

著作権 (17)

日本国 著作権法 <http://www.gpo.go.jp/ftp/text/da/4/4/G4/G40006.html>

第三條 著作権に含まれる権利の種類
(略す)

第二十一条 著作権は、その著作物を複製する権利を専有する。
...

(翻訳権、翻案権等)

第二十七条 著作権は、その著作物を翻訳し、編曲し、若しくは変形し、又は音色し、映画化し、その他翻案する権利を専有する。

著作権 (22)

アメリカ著作権法 和訳 (<http://www.copyright.com/copyright.html>)

第 106条 著作権のある著作物に対する排他的権利

第107条(以下)第122条を条件として、本権に基づき**著作権を保有する者は**、以下に列げる行為を行ひこれを行ふを許する**排他的権利を有する**。

- (1) 著作権のある著作物をコピーまたはワードに複製すること。
- (2) 著作権のある著作物に基づいて二次的著作物を作成すること。
- (3) 以下同様

表現は違つても、同じようなことを言っている

世界中で **権利を有している人だけが許諾(ライセンス)可能**

24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

© 2014 Creative Commons Attribution 4.0 International License

GNU GPLv2 第3条 <https://www.gnu.org/licenses/old-licenses/gpl-2.0-ja.html>

3. あなたは上記第2条および第2条の条件に従い許可条件に [同意する](#)こととします。

「プログラムの」に「ソースコード」を「オブジェクトコード」に「変換して」
て「複製または頒布することができ」る。 [詳細内容](#)

①、その適合しないものは以下のうちどれか1つを実施しなければならない
a) 著作物、プログラムの」に「対して」完全かつ機械で読み取り可能
なソースコードを「添付する」。(400)

b) 著作物、(400)ソースコード、(400)提供する旨述べた、少なくとも3年
間の有効な期間に「申し出を添える」 [詳細内容](#)

両者の間でなければ、「条件」は出来ぬいから、両面布置の「条件」
→ 両面布置の「義務」にない。それで手渡し、両に著作権侵害

[illegible]

作者自身が「GNU GPLは、契約ではない」と述べている
 例として、GPLv2当時FSF法務担当で、gnul、GPLv3起草者の一人である
 コロンビア大学のEben Moglen先生は2001年、以下の文書を公開



The screenshot shows a document header with the GNU logo and 'GNU Operating System' text. Below it is a navigation bar with links: 'Read GPL', 'Philosophy', 'Licenses', 'Education', and 'Sales'. The main title is 'Enforcing the GNU GPL'. The author is 'Eben Moglen' and the date is '10 September 2001'. A URL is provided: 'http://www.gnu.org/philosophy/enforcing-gpl.html'. The document concludes with the statement: 'Licenses are not contracts: ライセンスは契約ではない'.

GPLは契約ではないならば、何か？
 a license is a unilateral permission, not an obligation,
 ライセンスは、一方向的な許諾であり、(www.gnu.org)義務などではない

Transcript of Eben Moglen at the
 3rd of the 3rd International Free Software Summit
 https://www.gnu.org/campaigns/gn/g3/berkeley/moglen/transcript.html で同源。

ユースティニアヌス法典(1)から「自由な法学要綱(De Institutiones of Iustinian)記載引用

① 概論、ライセンスに対する契約が一般的になったからといって、
 「ライセンス自体がライセンスーライセンスとの契約」ではない。
 「ライセンス」に關して契約すれば、ライセンス契約の成立するだけ。
 ◎「ライセンス」と「ライセンス契約」を区別すること

[illegible]

知識の習得ではなく、**理解しよう**

OSS専門業者を自認する企業の人が
根拠の無い、聞いただけの話を繰り返している？！
いい加減な表現を習得しては危険でしょう。

「著作権」というものを理解して、
著作権に関わる記述としてライセンス条文を理解する、
そんな**根拠や論理が裏つ当な思考を心がけましょう。**

企業ソフトウェア開発者が著作権侵害しないために

Webサイトで公開しているフリーソフトにもその権利を行使しています
<http://jpn.cri.com/eos/osss/Checkeefast.pdf>

1 OSSライセンス、コンパイルライセンスを確認する

2 著作権を登録し、権利を主張する

3 ツールで確認する

4 OSSを承認する

5 著作権侵害しないようにする

正しいスライダにもなる理解の手引きをいたします

1. OSSライセンスと著作権法セミナー
2. OSS利用ガイドライン作成支援
3. 開発管理プロセス改善支援
4. 活動支援アドバイス
5. 製品価値・対価支援アドバイス

[illegible]

社内の啓発活動に、**無料セミナー**をご利用ください
<http://jpn.nec.com/oss/ossic/>



Orchestrating a brighter world

NEC